
Give me ♡ chocolate

佐和島ゆら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Give me 、 chocolate

【Nコード】

N0628T

【作者名】

佐和島ゆら

【あらすじ】

一人の少女の消失を忘れられない杉原美緒、その消失事件から目覚めた力を使ってゆがんだ人の心が生み出した世界を浄化し続けていた。

あるとき秋田の実家へ戻った際、突如彼女は過去と対面することになる。

前篇

三月終り、東京の桜のつぼみはふくらみ枝は重さで少し垂れていった。日の光も冬の頃に比べて高くなり、明るさと共に温かみを帯びてきた。

「あ、マフラー忘れた」

「どうりで、何かいつもと違うと思った」

まだ朝食を食べていないせいか、頭の齒車が回らない私に妹の早百合は自分の首を指差して言った。

「まあ、いいか。温かいし」

昨日までマフラーは寒くて欠かさずつけていたが、今日マフラーをつけたら気温で首周りに汗をかいていたかもしれない。

「本当温かいねえ。秋田はどうなんだろう」

「まだ寒いでしょ。桜前線なんてまだまだ先立って言うし」

そう言いながら早百合は律儀に携帯電話をつかって桜前線の情報調べだした。

「四月の中ごろから終りだって」

「そう、あつちはまだまだ冬かなあ」

「ちゃんと防寒して帰らないと」

早百合は携帯電話を閉じてポケットにしまった。

数日後に二人で秋田にある実家に帰ることになっていた。早百合は安いからとバスで行く様だったが、バスの狭い空間に耐えられない私は新幹線で帰ることにした。そして今朝駅に新幹線のチケットをとりに行こうとすると早百合も駅をつかって出かけるとの事でついてきた。

踏み切りの前にいくと甲高い音を立てて遮断機の長い棒が降りてきた。それと同時に早百合が大きなくしゃみをした。

「わ、風邪？」

「いやー熱はないけど。鼻がむずむずするだけ」

「……近寄らないで」

早百合に抑揚の無い口調で言い二三歩離れると早百合は苦笑いをした。

「ちょっとーやめてよ。風邪じゃないって。もしかしたら花粉症かも」

「なおの事、近づかないで。うつされたらたまらん」

「花粉症はうつらないって!」

ますます早百合のそばから離れようとする私に早百合は笑いながら近づいてきた。笑ってはいるがほんの少しだけ口調に焦りが見える。

こういう妹の姿は好きだったと思った。変だと思うけど、好きな子だからからかいたくなる性癖がつんと押されて胸が弾んで変な笑いが出た。

「気持悪っ」早百合は口の端をひきつらせた。

唐突に肩に寒気が走った。冷やしたナイフの先を胸元につきつけられたような、心の一番深いところにある恐れ of 感情を引き出す寒気だった。

遮断機の甲高い音が右耳だけに突き刺さるように響き、思わず右耳を押さえた。踏み切りの中、線路の間にセーラー服の少女の姿を見た。

少女はのっぺらぼうで首を縦に振ってゆらゆらと肩が揺れていた。膝下からは足がなかった。おかしな踊りをしているけど、そこからは感情が見えず、乱暴に扱われる人形にも見えた。

そこに白の塊が勢い良く通り過ぎた。ばくばくと白の塊は少女を潰し喰っていったように感じた。招待されると私は思わず身を引いた。往来の真ん中で意識は失いたくない。布団の中で招待してほしい。

「お姉ちゃん、どうしたの」

「へ?」

「ぼんやりしてさ」早百合はきょとんとした目で私を見つめた。線路をもう一度見ると遮断機はあがり歩き出している。

「ああ、うん」

曖昧な返事をしながら私はそつと早百合の腕を掴んだ。早百合は首をかしげた。

「え、何々？ どうしたの」

「離さないでね」

「離さないで？」

私は喉を指で撫でた。喉を強く押され続けたような痛みと息苦しさを感じる。頬が石膏の彫像のように硬くなっていた。

「大丈夫、お姉ちゃん？」

早百合はよく分からないといった表情を浮かべながらも、自分の腕をつかむ私の手の上に自分の手を重ねた。

「ごめんね、唐突に」

私は頬を緩ませて普段の表情を作ろうと努力した。へらへらと笑おうとした。その努力にどれくらい効果があるか分からなかったが、小百合の表情が怪訝なものではなくなっていた。線路を見ても白いものは見えなかった。大丈夫と思いつつも喉の奥で錠剤が引つかかっているような違和感と焦りがずっと残り続けていた。

数日後、一年半ぶりに東京から秋田に戻った。

午前中のうちに着いたので早速遊ぼうかと思いつきながら駅を出ると、首をすくめてしまうほどに冷たい雨が降っていた。幸い雨の勢いは弱い、空気は頬が張るほどに冷たく、どんよりと広がる灰色の雲は帰省した時に起こる奇妙な高揚感を萎えさせるのに充分だった。遊ぶ気はなくなってしまったが、それでも何か楽しいことは無いものかと駅前を当ても無く歩く。

大きなデパートが撤退してから十年以上たつ、今じやまともに開店しているのがパチンコ屋と病院しかない寂れた駅前、マンションや色んな小売店を出す再開発をはじめていた。灰の空と動きを鈍くする冷えの中、工事用の大きなついたてに描かれた緑に囲まれた白いおしゃれなマンションの完成予想図の前を、ほおかぶりとコート

で着込んだ腰の曲がったお婆さんが足早に通り過ぎっていった。それから十五分程駅前を歩いたが、見かけるのは老人ばかりだった。私がいたときと変わらず老人ばかりがこの街にいる。けれども以前と違って街には観光客向けの看板がいくつもたち、舗装の上に舗装を重ねたせいで波打つような道路は平坦でお花の模様までついた綺麗な道路へと生まれ変わっていた。どうもいつのまにか街はおめかしをするようになったようだ。けれどおめかしをする前の、今日の空のような街で暮っていた私にはそのおめかしが馴染めなかった。時間が止まっているかと思っていたのだけど、街の色をどんどんくすませて消えてしまうのかと思っていたのだけど、違うらしい。

違和感と寂しさが微妙に混ざり合い、水に落とした絵の具のように心の中へと落ち込んでいく中、私は駅前から出るバスに乗り、実家へと向かった。

バスの途中に通っていた中学校の裏にある山を見た。針葉樹が多い山は冬の気配が色濃い秋田でも深い緑に染められている。あの頃と何も変わっていないようだった。

相変わらず人が近寄らない山なのだろうか。ふとこの前テレビのドラマで見た胎児の姿が頭にちらついた。

家に帰ると母が迎え入れてくれた。黒髪だった母の頭は白髪が増え一気に灰色のものとなっていた。

「あれが愛なの？ 大きいな」

荷物を部屋に置き居間で母とくつろぎながら私が言つと母は頷いた。

家で飼っている猫の小梅の娘の愛はすっかり大きくなって畳の上に座っていた。最後に見たときはまだ生後数ヶ月の小さな姿だった。正直昔の姿と今の中型犬ぐらいの大きさの姿にギャップを感じずにはいらなかった。

「んだ。だから布団にはいられると寝る場所が大変なんだよ」

「へー、昔の私みたい」

昔は母と一つの布団で寝ると私が大の字になって寝るから、母は眼の下に毎度クマをつくっていた。

「んだなあ。たしかにそっくりだ」

母の顔をよく見るとうつすらと目の下にクマが出来ていた。

「その、にゃああんって小梅の娘とは思えないような弱い声で野良猫を威嚇する姿は覚えてるんだよね」

「……それ未だに変わらないな。もうなあれだ。愛は愛されているから、じいちゃんからベタばれされるお嬢様だからしょうがない」

「ふうーん」

愛を胸元に抱くと愛は大きな目で私を見た。表情に不快さは感じない。

小梅だったら「しょうがない、抱かせてあげる」という上から視線を感じるのだが愛の場合は本当されるがまだ。

「本当、この子……猫なの？」

「んー、図体は大人なだけだな」

私が愛を畳の上におろすとちょうど小梅が開いた玄関の戸から入って、コンクリのたたきで丁寧に自分の体を舐めはじめた。愛は小梅に近づいていく。すると小梅はぶんと愛の顔すれの位置で手を払い、眉間に皺を寄せ愛を目で威嚇した。愛は見るからにおびえの混じった表情を浮かべて、けれど小梅から離れず側にいた。

「小梅、怖っ！」

「最近、小梅の態度ずつとあーなんだよ」

「前にきたときは仲良くて、すごく色々しつけているなあと思ったけど」

「んだなあ。そうだお茶飲むが？」

「ありがと」

母が湯呑みにお茶を入れる。ふと思いついたように母親は言った。「やっぱ、手術したからじゃねがと思うんだ。子供のうちに子供を産めないようにしたから。大人にならなくて」

「大人にならない……」

私は小梅と愛を見た。

あんなに邪険をしていたのに打って変わって小梅は愛の毛づくろいをしてあげていた。愛の目は細くなり気持ちよさそうだったが少しすると体をよじらせ小梅の毛づくろいを中断させた。すると小梅は怒った鳴き声を出して愛を威嚇した。愛はおろおろとしているが小梅はかまわず外へと行ってしまった。それは親子の姿というよりは、従者にわざわざ優しくした主人が、従者に優しさを断られて怒ったような……感じがした。そういえば、昔見たテレビ番組で、野良猫の子育てを追ったドキュメントがあった。小学生の頃に見た記憶だから内容はほとんど覚えていない。けれど最後の場面だけが記憶に焼き付いている。成長して一人前になりかけた子猫たちの前から母親は突然いなくなるのだ。

母親は役目が終わると、母親を辞めてただの猫になった。まさかもう、小梅に自分が母親だという認識はないのだろうか。愛は同居する猫にすぎないのだろうか。けれど愛は大人になることのない子供で、まだ小梅の娘という認識がある気がする。本当にお母さんが大好きで、お母さんを求め続けている。

「私たちが愛の猫という人生を手術でゆがめたのが、愛と小梅の間に影響した……か。まあ、ハラまれたら困るのは猫じゃなくて、私たちだものね」

「実際子供なんか生まれたら困るし、しょうがねえ。それより、もう少ししたら夕食の準備手伝えな」

「……お腹痛いって事でキャンセル出来ませんか」

母は首を横に振った。無駄とはわかりつつも思わず私は言った。

「今日の夜に来る早百合を迎えに行くから。勘弁して」

渋々だが母は頷いてくれた。さっそく早百合に電話をかけて私が迎えに行くことを伝える。

「お姉ちゃん来るの？ 携帯と財布は忘れちゃだめだよ、また」

早百合の言葉聞こえたのか母は呆れたように私を見て言った。

「まだ忘れっぽいのか？ おめは」

「じ、ごめんなさい」

夕食後、早百合が到着した駅に迎えに行った。早百合は二つのバックを右肩左肩それぞれに引っかけて携帯の画面を見ていた。「おろして待つてればいいのに」と声をかけると「さっき電話した時、すぐに来れるって言ってたから」と私にバックの一つを渡しながら言った。

駐車場にまたせていたタクシーに乗って私がポケットからチョコレート菓子を取り出し食べ始めると早百合は携帯をポケットにしまった。

「よし、終わった」

「何が？」

「んー明後日に友達に会おうと思ってさー。打ち合わせしてた」

「へえ」

「姉ちゃんは友達に会わないの？」

「そんな相手はいないよ。誰とも連絡がつかないし、それに消えちゃった人もいる」

「ふうん」

「家でまったりしてますよ」

早百合は狭い車内で腕を伸ばした。前の座席の頭の部分をぐーと押す。

「ま、一人は気楽だよね」

空気に漂う早百合の言葉を唇でつまんで口に入れて頭に届けて私は頷いた。

「そうそう。家族がいれば十分です」

大好きな人間としか付き合いたくないんだよねと言うとまじまじと早百合は私を見た。

「えー何々それ、どういうこと？」

「ふっふっふ。早百合ー私にそれを言わせるの？ 気持ち悪いねー」

「えへへ、ほめ言葉だね」

「素面なのが本当きもちわるーい」

「てへへへ」

そしてお互い黙り込んだ。私はチョコレート菓子を口に入れて咀嚼し、早百合は窓の外の暗闇を眺める。

二人の間には慣れ親しんでいる暖色の空気が流れていた。会話がなくても全然苦痛じゃない、隣いる事に何の違和感もない。それが当たり前という幸せに私は酔っていた。

瞼を閉じるとのっぺらぼうのセーラー服の少女が首を揺らしていた。

ついてきたのかと思いつきながら目を開けると、上も下も黒に近い藍色の世界で線路が縦横無尽に走り、のっぺらぼうの少女がくるくると踊って線路を走る電車に踏みつぶされ喰われている場所にいた。やはり招待されたらしい。今しがた食われたはずののっぺらぼうの少女は遊ぼうよと言わんばかりの足取りで私に近づいてくる。

「さあ、あなたも潰れよう？ 終わってしまったおう？」

のっぺらぼうの少女の白い長い指先で手をつかまれた。

のっぺらぼうのどこから出ているのか分からない甘いささやきに私は首を横に振った。

「家族を置いていけないし。それにここはむなしいんだよね。あなた以外誰もいない」

私は両腕を広げて藍色の空を見た。星ひとつもない寂しい空。

「だからね、私がにぎやかにしてあげる。自慰に飽きたでしょう？ 創造も限界でしょう？」

雪崩のような勢いの星が藍色の空を掛けていく。電車は角の丸いタオル生地出来た電車になりころんと線路から外れて横たわる。そしてお菓子の家になった。

「さあ、私と踊ろうよ」私はのっぺらぼうの少女の両手を取って笑った。

のっぺらぼうのセーラー服の少女は銀の冠をつけて白いドレスを身にまとったお姫様になる。呆然としながらのっぺらぼうから顔が

出来たお姫様は私を見る。

「壊れるまでそばにいるから」

私が言うとお姫様の顔に表情が生まれた　泣き笑っていた。

そしてお姫様と私は踊った。さびしくないようビー玉が線路の上をはねて伴奏する。

藍色の世界が真っ白な世界となり両手の先にあつた感覚も感じられなくなるまで踊りつづけた。

後編？

三月の終わりとはいえまだまだ肌寒い秋田にしては思わずぼんやりと夢想してしまう程に暖かった。愛は開けられた玄関の前にあるコンクリートのたたきで寝ころんだり、ごろごろとのどをならしていた。愛の横には白いカゲが見える。幻覚なんだろうか。そういう虚気楼なんだろうか。近づいてみれば分かると思い私は猫の側のカゲに近づき手を伸ばすと強い光が射して思わず目を閉じた。

目を開けると、愛のような猫のカゲの側に中学生ぐらいの三つ編みの制服姿の少女がしゃがんでいた。小さく鼻歌を歌っている。

「あなたは……」

私が声をかけると女の子はくりくりした目を私に向けていた。

「あ、すいません。この子、可愛い猫ですねえ、つい触っちゃいました」

見覚えがあるというか、忘れられない顔が目の前にあった。篠原真里奈、私が中学生の時になくなった子だ。

「どうしてここに？ 篠原さんの？」

「私の名前を知っているんですか？ え、ごめんなさい。私お姉さんの事、全然知らないのですけどお」

やはり篠原真理奈のようだ。性格が随分違うが。

「一応知り合いなのよ、篠原さん」

柔らかな表情を浮かべて私は篠原を見る。心は急激に張り詰めていた。

「愛。こっちに来なさい」

声をかけると愛はみゃあんと鳴きながら私の足下にすりよってきた。

「その猫、あいつて名前なんですか？」

「ええ。私の母親が名付けたの。LOVEちゃんって生まれたばかり

りの頃に言っていたけど、呼びづらいのかいつからか愛って呼ぶようになったの」

「あはは、おもしろーい。愛しているんですねえ、お母さん」

篠原は両手をあわせて笑った。

「そうね。その愛情たつぷりの生活だったせいか、猫としてはおつとりしすぎなのよね。人なつつこいし。母親とは大違い」

篠原は目を大きくして、興味津々な口調聞いてきた。

「え、この子のお母さん？ お母さんももしかして飼っているんですか？」

私は小さく頷いた。もしこの話を聞いたら、彼女はと思うだろう。

「ええ。小梅っていう母親がいるの。まあ小梅からしたら母親はとつくにやめているようなものだけど、愛はそのことを理解していないから、親子関係が終わったという母親の認識とギャップがあつてね。そのせいで小梅がいらして愛に対して態度がきついよね。元野良猫のせいか、どこまでもひとりというか自分中心の世界にいるのよね」

「きついですねえ、ひええ」

「猫はひとりぼっちが当たり前だから。人間と暮らして飼われるこんな生活はゆがみを生み出しているのかも」

「まー人間でもありがちですよね、おかしい関係の親子って。猫にもあるんですね」

声が一本調子になっている。興味津々といった表情は変わらないけど動揺はしているようだ。

成長したら母親が母親を忘れて自分の人生と仕事に熱心になってしまった篠原の人生。でもあの子はこんな軽薄な感じがする子ではなかった。篠原はあつと声をあげた。

「じゃ、じゃあ。私学校に用事があるんで」

「待って」

「何ですか？」

歩きだした篠原はちよつと眉をひそめて聞き返した。

急いでいる事を露骨にかくさない。

「篠原さんの学校。 中学校でしょう、私、その卒業生なの。 久しぶりに見に行きたいし案内してくれない？」

「ええーと、それは」

妙に間延びした声を上げる篠原から視線を外し、私は自分の服のポケットを探った。ここがそういう場所なら招待された私のほしいものは願うだけで手には入るはずだ

私はポケットから小さなチョコレート色の箱をさしだした。

「東京にあるお店のおいしいチョコなんだけど、これあげるわ。限定品なの」

「え、でも」

「まあまあ食べてみてよ」

私は箱の封を切り一口大の銀紙に包まれたチョコを一つ渡した。戸惑う篠原の前で私はチョコレートを口に入れた。子供が好きそうな甘ったるいチョコレートだと思った。

篠原もチョコレートを口に入れると妙に甲高い声を上げた。

「すっごーい。おいしい。え、これ全部私にくれるんですか？ 学校案内したら」

「案内してくれるなら、今すぐ渡すよ」

「はいはいはい！ 私やりまーす」

交渉成立という事で篠原にチョコ入りの箱を渡すと早速篠原は三つのチョコを口に入れて喜色満面で頬張った。私は箱の裏に書かれた材料を思い出した。確か「愛」という添加物がかなりの量で入っていた。

「うわーおいしい。何でこんなにおいしいんだろう」

ぱくぱくぱくぱくとチョコを愛らしく貪る。五分もたたずに篠原に渡したチョコは全部篠原のお腹の中に入ってしまった。

きつと猫の生育には良くないと思い、愛は家へ先に戻した。それ

から篠原とともに中学校へと向かった。

ろくな思い出もない中学校には卒業した以来来ることはなかった。正直、篠原が私の目の前に現れなければ来ることはなかっただろう。

けれど篠原は現れた。私は心の底に沈みませたあの事が動き出すのを感じていた。

学校に到着して篠原のクラスだという教室に案内してもらうと、そこには制服姿の篠原の友人たちがいた。白猫のキーホルダーを鞆につけた女の子、青い丸い石がついたブレスレットをつけた女の子、赤いキャップ帽を被っている男の子に、緑色の腕時計をつけた男の子がいた。

「あれ、皆いたんだ？」

篠原は素っ頓狂な声を上げて友人の元に駆け寄っていった。私は友人との会話を始める篠原から目を離し教室を見回した。見覚えがあるものばかりだ。くすんだクリーム色のカーテンは窓枠の端できちんとひもでまとめられず、だらしなく下がっている。私はこの端によくいた。窓を開けて風を感じながら学級文庫に置かれた本や漫画を読んでいた。五月の風が大好きになったのは、ここで天気や気温が体を壊さないものでないものであれば、飽きることなく本を読んで季節を感じ続けたからだ。そういえば学年集会が終わった後に、一番で教室に戻ったと思ったら窓枠に足を乗せてカーテンにくるまって隠れる男の子がいた。それを知らずに学級文庫の本をつかんで窓の端へ行ったら、男の子と目があってわっと声をかけられて、驚きのあまり私は腰をぬかして涙目になってしまった事がある。

あれ？ おもしろいかな、この思い出……

ろくでもない思い出ばかりではないというか、思い出を見る目が変わる自分がいた。成長なのか劣化なのか懐古なんてする程遠い記憶になってしまったのか。

私は教室の端にある席へと向かった。そこは記憶にある私の席だ

った。机には鉛筆書きのへたくそな猫のイラストが描かれている。この動物を頭の中で動かすのが楽しい頃だった。だけどそれはもう遠い話、思い出に成り下がった「終わった時」のお話だ。

私は篠原に聞いた。

「ねえ篠原さん。ここの席の子は誰か知っている？」

「その子？ えーと誰だったけ？ じみーな子で、えつとお」

首を傾げて篠原は、自分の頭を指でとんとたたきながらうるような声で言った。思い出すのに四苦八苦をしていたのは見るだけで、腹の底が燃える感じがしたので私は口を開けた。

「杉原美緒という子が座っていたんだよ。真里奈ちゃん」続けて私は言った。

「今日も捨てるの？ 真里奈ちゃん」

瞳孔が開いた真里奈ちゃんの顔は、時計回りに一回転して戸惑いの声を上げた。

「え？」

ここは少なくとも現実ではないのは確かだった。ここはきっと真里奈ちゃんの夢の世界、一人と気づかないまま踊りつづけてきたもの。私はこういう世界に来たのは初めてではなかった。今まで何度も招待された事がある。独りは淋しい独りではもう維持できないと夢の世へ誘う手に、私は自分から掴みにいっていったから。

「何を言っているの？ 訳わかんない」

「それはどつちかという私の台詞だよ。真里奈ちゃん。あなたはこんな世界をつくるものになっちゃったの」

「こんな世界？ つくる？ 何言ってるの？ いい大人が変なことを言うなんて」

「気持ち悪いかな。真里奈ちゃんの言うことが正しいのなら、やっぱり私は頭がおかしいのかなあ」真里奈ちゃんは私の顔を見て、激しい表情を浮かべた顔を慄然なものにした。

「べ、別にそんな事言ってるんじゃない」

私は首を横に振った。そんな言葉は聞き飽きていた。人に区別をつけるのに、区別をつけた自分は決して肯定はしない。何となくの言葉の綾です、悪気のない、気持ちの悪いもの。私は思わず息をついた。反吐が出る。

そんな言葉を真里奈ちゃんが言うなんてあり得ないのに

どこまでもきれいで、どこまでも間違っていない真里奈ちゃん。それを私は信じていた。真里奈ちゃんも信じていたはずなのに、そうでありたかったはずなのに。

それに疲れてしまっても誰にも受け止めてもらえなかった真里奈ちゃん。喉の奥からわめくような謝罪の言葉がせりあがる。唇を真一文字にしてそれに耐えた。謝罪じゃ真里奈ちゃんは救えない。

教室は四方の壁も天井も床も白いスクリーンになっていた。私の格好は中学の制服となり、容姿も中学時代のものになっていた。

「少しお話をさせて、真里奈ちゃん。私の知っていることなんだけどね」

スクリーンに中学校の廊下が映った。廊下にはゴミ箱を持って歩く私がいて、真里奈ちゃんが私の背中に言葉を投げる。

「ねえ、まだ捨てても大丈夫？」

「う、うん。大丈夫だけど」

真里奈ちゃんはいくしゃくしゃに丸めた茶色の紙をゴミ箱に捨てた。私はひゃあと思いつながら、ゴミ箱を置いて真里奈ちゃんに聞いた。

「そ、それ、確か親御さんに見せてくださいって言われて渡された紙じゃない」

事も無げなく頷き、真里奈ちゃんは綺麗な髪を指先で弄くった。

「知っている。ゼーんぜんたいした内容は書いてないよ、この紙。

PTAの懇親会のご案内」

「PTAの？ 真里奈ちゃんの親御さんが行くかもしれないじゃない。いいの？」

不安を覚えながら私が眉をひそめると、真里奈ちゃんは手のひら

を軽く横に振りながらからからと笑った。

「杉原ちゃんって真面目だなあ。大丈夫、大丈夫。母さんは仕事が恋人なの。こんな懇親会の参加で愛する人をほっぽりだすわけないよあ」

「そうなの、何かすごいね。バリバリのキャリアウーマンなんだね」

「そ、出来る人だからねーうちの母さんは」

笑いながら真理奈ちゃんは言った。

ゴミ箱の中身をゴミ捨て場に捨てて教室に戻るまでずっと私と真理奈ちゃんは話した。真理奈ちゃんの家はお母さんと真理奈ちゃんしかない私はその時初めて知った。私が大好きなアニメの話をする。真理奈ちゃんはきちんと聞いてくれた。

真理奈ちゃんはずっと楽しそうに笑っていた。どうしてそんなに楽しそうに笑えるんだろう、うらやましいなと私は思った。

クラスには上位の人間と下位の人間と存在している事が許されるのを喜ばなきゃいけない人間いると思っていた。

私はいじめられなかった。たまに突然驚かされたけど机をひっくり返っていただけで、それ以外は無視されていたから。

存在が無なのに、こうして生きている事……それは幸せだと思った。お母さんと早百合もいる。私が大人になる頃に死んだお父さんは、真理奈ちゃんと話すようになった頃からずっと家にいなかった。だけど時々家にいて機嫌がいいと「お父さん」をやってくれた。それも幸せ、飴をなめるような幸せ。いつかは溶ける空しいものだけどそれを感じてはいなかったから私は幸せだと思った。気づかないということに気づかないという幸せに溺れていた。溺れて心はとくに壊れていた。

一人ぼっちはきつときびしいことなのだろう。だけどそれが当たり前なら何でもないことだった。真理奈ちゃんに話しかけられた頃

の私にはもう、少なくとも学校における一人ぼっちについて何かを感じることがなかった。

何でも一人でやる事にした。それはよくないと先生にも何度も呼び出された。さびしいと泣いたらどうなのだろう　無視しているだけで有難いと謝らなきゃいけないのだろう。個性という言葉で強引に塗りつぶされた頭のおかしさはどうしたって変わるわけない。そんな変な生き物を理解するなんて面倒くさい作業が誰がしたがるのだろうと思っていた。そもそも友達の作り方もよく分からないし、友達だからとトイレにいつも一緒にいかなきゃいけないなんて面倒くさい。どうして皆つながりたがるのだろうと思っていた。

だけどゴミ捨ての間、真理奈ちゃんと少し話していくうちに「つながり」の大事さを感じる事ができるようになっていった。真理奈ちゃんと「友達」なのかなと胸の中に甘酸っぱくときめいた。皆が友達を探して、友達ルールに縛られてでも作るうとする気分が分かり始めた気がした。ちょっと素敵だなと思った。

それともいつもクラスの真ん中で誰かしらと楽しく話す真理奈ちゃんなんて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0628t/>

Give me ` chocolate

2011年5月10日23時13分発行